札幌

石川啄木

青空文庫

半生を放浪の間に送つて來た私には、折にふれてしみじみ思出される土地の多い中に、札幌の二週間ほど、慌しい樣な懷しい記憶を私の心に殘した土地は無い。あの大きい田舍町めいた、道幅の廣い物靜かな、木立の多い洋風擬ひの家屋の離れ／〃＼に列んだ——そして甚※大きい建物も見涯のつかぬ大空に壓しつけられてゐる樣な石狩平原の中央の都の光景は、やゝもすると私の目に浮んで來て、優しい伯母かなんぞの樣に心を牽引ける。一年なり、二年なり、何時かは行つて住んで見たい樣に思ふ。

私が初めて札幌に行つたのは明治四十年の秋風の立初めた頃である。——それまで私は函館に足を留めてゐたのだが、人も知つてゐるその年八月二十五日の晩の大火に會つて、幸ひ類燒は免れたが、出てゐた新聞社が丸燒になつて、急には立ちさうにもない。何しろ、北海道へ渡つて漸々四ヶ月、内地（と彼地ではいふ）から家族を呼寄せて家を持つた許りの事で、土地に深い親みは無し、私も困つて了つた。其處へ道廳に勤めてゐる友人の立見君が公用旁々見舞に來て呉れたので、早速履歷書を書いて頼んで遣り、二三度手紙や電報の往復があつて、私は札幌の××新聞に行く事に決つた。條件は餘り宜くなかつたが、此際だから腰掛の積りで入つたがよからうと友人からも言つて來た。

私は少し許りの疊建具を他に讓る事にして旅費を調へた。その時は、函館を發つ汽車汽船が便毎に「燒出され」の人々を滿載してゐた頃で、其等の者が續々入込んだ爲に、札幌にも小樽

にも既う一軒の貸家も無いといふ噂もあり、且は又、先方へ行つて直ぐ家を持つだけの餘裕も無しするから、家族は私の後から一先づ小樽にゐた姉の許へ引上げる事にした。

九月十何日かであつた。降り續いた火事後の雨が霽ると、傳染病發生の噂と共に底冷のする秋風が立つて、家を失ひ、職を失つた何萬の人は、言ひ難き物の哀れを一樣に味つてゐた。市街の大半を占めてゐる燒跡には、假屋建ての鑿の音が急がしく響き合つて、まだ何處となく物の燻る臭氣の殘つてゐる空氣に新らしい木の香が流れてゐた。數少ない友人に送られて、私は一人夜汽車に乘つた。

翌曉小樽に着く迄は、腰下す席もない混雜で、私は一晩車室の隅に立ち明した。小樽で下車して、姉の家で朝飯を喫め、三時間許りも假寢をしてからまた車中の人となつた。車輪を洗ふ許りに涵々と波の寄せてゐる神威古潭の海岸を過ぎると、錢函驛に着く。汽車はそれから眞直に石狩の平原に進んだ。

未見の境を旅するといふ感じは、犇々と私の胸に迫つて來た。空は低く曇つてゐた。目を遮ぎる物もない曠野の處々には人家の屋根が見える。名も知らぬ灌木の叢生した箇處がある。沼地がある——其處には蘆荻の風に騷ぐ狀が見られた。不圖、二町とは離れぬ小溝の縁の畔路を、赤毛の犬を伴れた男が行く。犬が不意に驅け出した。男は膝まづいた。その前に白い煙がパッと立つた——獵犬だ。蘆荻の中から鳴らしい鳥が二羽、横さまに飛んで行くのが見えた。其向ふには、灌木の林の前に茫然と立つて汽車を眺めてゐる農夫があつた。

恁くして北海道の奥深く入つて行くのだ。恁くして、或者は自然と、或者は人間同志で、内地の人の知らぬ劇しい戰ひを戰つてゐる北海道の生活の、だん〳〵底へと入つて行くのだ——といふ感じが、その時私の心に湧いた。——その時はまだ私の心も單純であつた。既にその劇しい戰ひの中へ割込み、底から底と潛り拔けて、遂々敗けて歸つて來た私の今の心に較べると、實際その時の私は單純であつた。——

小雨が音なく降り出した來た。氣が付くと、同車の人々は手廻りの物などを片付けてゐる。小娘に帶を締直して遣つてゐる母親もあつた。既う札幌に着くのかと思つて、時計を見ると一時を五分過ぎてゐた。窓から顏を出すと、行手に方つて蓊乎(こんもり)として木立が見え、大きい白いペンキ塗の建物も見えた。間もなく其建物の前を過ぎて、汽車は札幌驛に着いた。

乘客の大半は此處で降りた。私も小形の鞄一つを下げて乘降庭(プラットホーム)に立つと、二歲になる女の兒を抱いた、背の高い立見君の姿が直ぐ目についた。も一人の友人も迎へに來て呉れた。

『君の家は近いね?』

『近い? どうして知つてるね?』

『子供を抱いて來てるぢやないか。』

改札口から廣場に出ると、私は一寸停つて見たい樣に思つた。道幅の莫迦に廣い停車場通りの、兩側のアカシアの街(なみき)※は、蕭條たる秋雨に遠く〳〵煙つてゐる。其下を往來する人の歩みは皆靜かだ。男も女もしめやかな戀を抱いて歩いてる樣に見える、蛇目の傘をさした若い女の

紫の袴が、その周匝の風物としつくり調和してゐた。傘をさす程の雨でもなかつた。

『この逵は僕等がアカシヤ街と呼ぶのだ。彼處に大きい煉瓦造りが見える。あれは五番館といふのだ。……奈何だ、氣に入らないかね？』

『好い！　何時までも住んでゐたい――』

實際私は然う思つた。

立見君の宿は北七條の西何丁目かにあつた。古い洋風擬ひの建物の、素人下宿を營んでゐる林といふ寡婦の家に室借りをしてゐた。立見君は其室を『猫箱』と呼んでゐた。臺所の後の、以前は物置だつたらしい四疊半で、屋根の傾斜なりに斜めに張られた天井は黒く、隅の方は頭が閊へて立てなかつた。其狹い室の中に机もあれば、夜具もある、行李もある。林務課の事業手といふ安腰辨の立見君は、細君と女兒と三人で其※室にゐ乍ら、時々藤村調の新體詩などを作つてゐた。机の上には英吉利人の古い詩集が二三册、舊新約全書、それから、今は忘れて讀めなくなつたと言ふ獨逸文の宗教史――これらは皆、何かしら立見君の一生に忘れ難い記念があるのだらう――などが載つてゐた。

私もその家に下宿する事になつた。尤も空間は無かつたから、停車場に迎へに來て呉れたも一人の方の友人――目形君――と同室する事にしたのだ。

宿の内儀は既う四十位の、亡夫は道廳で可也な役を勤めた人といふだけに、品のある、氣の確乎した、言葉に西國の訛りのある人であつた。娘が二人、妹の方はまだ十三で、背のヒョロ高い、愛嬌のない寂しい顏をしてゐる癖に、思ふ事は何でも言ふといつた様な淡白な質で、時々間違つた事を喋つては衆に笑はれて、ケロリとしてゐる兒であつた。

姉は眞佐子と言つた。その年の春、さる外國人の建ててゐる女學校を卒業したとかで、體はまだ充分發育してゐない様に見えた。妹とは肖ても肖つかぬ丸顏の、色の白い、何處と言つて美しい點はないが、少し藪睨みの氣味なのと片笑靨のあるのとに人好きのする表情があつた。女學校出とは思はれぬ様な温雅かな娘で、絶え／〃＼な聲を出して讃美歌を歌つてゐる事などがあつた。學校では大分宗教的な教育を享けたらしい。母親は、妹の方をば時々お轉婆だ／＼と言つてゐたが、姉には一言も小言を言はなかつた。

その外に遠い親戚だという眇目な男がゐた。警察の小使をした事があるとかで、夜分などは『現行警察法』といふ古い本を繙いてゐる事があつた。その男が内儀さんの片腕になつて家事萬端立働いてゐて、娘の眞佐子はチョイ／＼手傳ふ位に過ぎなかつた。何でも母親の心にしては、末の手頼にしてゐる娘を下宿屋の娘らしくは育てたくなかつたのであらう。素人屋によくある例で、我々も食事の時は一同茶の間に出て食卓を圍んで食ふことになつてゐたが、内儀はその時も成るべく娘には用をさせなかつた。

或朝、私が何か捜す物があつて鞄の中を調べてゐると、まだ使はない繪葉書が一枚出た。青

草の中に罌粟らしい花が澤山咲き亂れてゐる、油繪まがひの繪であつた。不圖、其處へ妹娘の民子が入つて來て、

『マア、綺麗な……』

と言つて覗き込む。

『上げませうか？』

『可くつて？』

手にとつて嬉しさうにして見てゐたが、

『これ、何の花？』

『罌粟。』

『恁※花、いつか姉ちやんも畫いた事あつてよ。』

すると、其日の晝飯の時だ。私は例の如く茶の間に行つて同宿の人と一緒に飯を食つてゐると、風邪の氣味だといつて學校を休んで、咽喉に眞綿を捲いてゐる民子が窓側で幅の廣い橄欖色の飾紐を弄つてゐる。それを見付けた母親は、

『民イちやん、貴女何ですそれ、また姉さんの飾紐を。』

『貰つたの。』とケロリとしてゐる。

『嘘ですよウ。其　色はまだ貴女に似合ひませんもの、何で姉さんが上げるものですか？』

『眞箇。ホラ、今朝島田さんから戴いた綺麗な繪葉書ね、姉ちやんが、あれを取上げて奈何し

ても返さないから、代りに此を貰つたの。』

『そんなら可いけど、此間も眞佐アちやんの繪具を那※にして了うたぢやありませんか』

私は列んでゐた農科大學生と話をし出した。

それから、飯を濟まして便所に行つて來ると、眞佐子は例の場所に座つて、（其處は私の室の前、玄關から續きの八疊間で、家中の人の始終通る室だが、眞佐子は外に室がないので其處の隅ッコに机や本箱を置いてゐた。）編物に倦きたといふ態で、片肘を机に突き、編物の針で小さい硝子の罎に插した花を突ついてゐた。豌豆の花の少し大きい樣な花であつた。

『何です、その花？』と私は何氣なく言つた。

『スヰイトピーです。』

よく聞えなかつたので聞直すと、

『あの遊蝶花とか言ふさうで御座います。』

『さうですか、これですかスヰイトピーと言ふのは。』

『お好きで被入いますか？』

『さう！可愛らしい花ですね。』

見ると、耳の根を仄のり紅くしてゐる。私は其儘室に入らうとすると、何時の間にか民子が來て立つてゐて、

『島田さん、もう那※繪葉書無くつて？』

『ありません。その内にまた好いのを上げませう。』
『マア、お客様に其　事言ふと、母さんに叱られますよ。』と、姉が妹を譴(たしな)める。
『ハハヽヽヽ。』と輕く笑つて、私は室に入つて了つた。
『だつて、折角戴いたのは姉ちやんが取上げたんだもの……』と、民子が不平顔をして言つてる様子。
眞佐子は、口を抑へる様にして何か言つて慰めてゐた。
私は毎日午後一時頃から社に行つて、暗くなる頃に歸(かへり)つて來る。その日は歸途に雨に會つて來て、食事に茶の間に行くと外の人は既う濟んで私一人限(きり)だ。内儀は私に少し濡れた羽織を脱がせて、眞佐子に切爐の火で乾(ほ)させ乍ら、自分は私に飯を裝(よそ)つて呉れてゐた。火に翳した羽織からは湯氣が立つてゐる。思つたよりは濡れてゐると見えて却々乾せない。好い事にして私は三十分の餘も内儀相手にお喋舌(しやべり)をしてゐた。

その翌日、私の妻が來た。既(も)う函館からは引上げて小樽に來てゐるのであるが、さう何時までも姉の家に厄介になつても居られないので、それやこれやの打合せに來たのだ。私の子供は生れてやつと九ヶ月にしかならなかつたが、來ると直ぐ忘れないでゐて私に手を延べた。
が、心がけては居たのだが、空家(あきや)、せめて二間位の空間と思つても、それすらありさうにな

かつた。困つて了つて宿の内儀に話をすると、

『然うですねえ。それでは恁うなすつちや如何でせう。貴方のお室は八疊ですから、お家の見付かるまで當分此處で我慢をなさる事になすつては？　さうなれば目形さんには別の室に移つて頂くことに致しますから。何で御座いませう、貴方方もお三人限……？』

『まだ年老つた母があります。外にもあるんですが、それは今直ぐ來なくても可いんです。』

『マア然うですか、阿母さんも御一緒に！　……それにしても立見さんの方よりは窮屈でない譯ですわねえ、當分の事ですから。』

話はそれに決つて、妻は二三日中に家財を纏めて來ることになつた。女同志は重寶なもので、妻は既う内儀と種々生計向の話などをしてゐる。

眞佐子は、妻の來るとから私の子供を抱いて、のべつに頬擦りをし乍ら、家の中を歩いたり、外へ行つたりしてゐた。泣き出しさうにならなければ妻の許に伴れて來ない。

『小便しては可けませんから。』と妻が言つても、

『否、構ひませんから、も少し借して下さい。』と言つて却々放さない。母親は笑つて居た。

二人限になつた時、妻は何かの序に恁　事を言つた。

『眞佐子さんは少し藪睨みですね。穩しい方でせう。』

驚て出社の時刻になつた。玄關を出ると、其處からは見えない生垣の内側に、私の子を抱いた眞佐子が立つてゐた。私を見ると、

『あれ、父様ですよ。父様ですよ。』と言つて子供に教へる。

『重くありませんか、其　に抱いてゐて?』

『否、嬢ちやん、サア、お土産を買つて來て下さいツて、マア何とも仰しやらない!』と言ひながら、耐らないと言つた態に頬擦りをする。赤兒を可愛がる處女には男の心を擽る様な點がある。私は二三歩眞佐子に近づいたが、氣がつくと玄關にはまだ妻が立つてるので、其儘門外へ出て了つた。

歸つて來た時は、小樽へ歸る私の妻を停車場まで見送りに行つた眞佐子も、今し方歸つた許りといふところであつた。その晩は、立見君は牧師の家に出かけて行つたので、私は室にゐて手紙などを書いた。茶の間からは女達の話聲が聞える。眞佐子は私の子供の可愛かつた事を頻りに數へ立てゝゐる、立見君の細君もそれに同じてはゐたが、何となく氣の乘らぬ聲であつた。

翌日は社に出てから初めての日曜日、休みではないが、明くる朝の新聞は四頁なので四時少し前に締切になつた。後藤君はその日缺勤した。歸つて來て寢ころんでゐると、後藤君が相變らずの要領を得ない顔をして入つて來て、

『少し相談があるから、今夜七時半に僕の下宿へ來給へ。僕は他を廻つてそれ迄に歸つてるか

ら。』

と言つて出て行つた。直ぐ戻つて來て私を玄關に呼出すから、何かと思ふと、

『君、祕密な話だから、一人で來てくれ給へ。』

『好し、一體何だね？　何か事件が起つたのかね？』

『君、聲が高いよ。大に起つた事があるさ。吾黨の大事だ。』と、黄色い齒を出しかけたが、直ぐムニャ〳〵と口を動かして、『兎に角來給へ。成るべく僕の處へ來るのを誰にも知らせない方が好いな。』

そして右の肩を揚げ、薄い下駄を引擦る樣にして出て行つて了つた。「よく祕密にしたがる男だ！」と私は思つた。

私はその晩の事が忘られない。

夕飯が濟むと、立見君と目形君は、教會に行くと言つて、私にも同行を勸めた。私は社長の宅へ行く用があると言つて斷つた。そして約束の時間に後藤君の下宿へ行つた。

座にはS——新聞の二面記者だといふ男がゐた。後藤君は私を其男に紹介した。私は、その男が所謂「祕密の相談」に關係があるのか、無いのか、一寸判斷に困つた。片目の小さい、始終唇を甜め廻す癖のある、鼻の先に新聞記者がブラ下つてる樣な擧動や物言ひをする、可厭な男であつた。

少し經つと、後藤君は私に、

『君は既う先に行つたのかと思つてゐた。よく誘つて呉れたね。』

これで了解めたから、私も可加減にバツを合せた。そして、

『まだ七時頃だらうね？』

『奈何して、奈何して、既う君八時ぢやないか知ら。』

『待ち給へ。』とS――新聞の記者が言つて、帶の間の時計を出して見た。『七時四十分。何處かへ行くのかね？』

『あゝ、七時半までの約束だつたが――』

『然うか。それでは僕の長居が邪魔な譯だね。近頃は方々で邪魔にしやがる。處で行先は何處だ？』

『ハハヽヽ。然う一々他の行先に干渉しなくても可いぢやないか。』

『祕すな！　何有、解つてるよ、確乎と解つてるよ。高が君等の行動が解らん樣では、これで君、札幌は狹くつても新聞記者の招牌は出されないからね。』

『凄じいね。ところで今夜はマアそれにして置くから、お慈悲を以て、これで御免を蒙らして頂かうぢやないか？』

『好し、好し、今歸つてやるよ。僕だつて然う沒分曉漢ではないからね、先刻御承知の通り。處でと――』と、腕組をして凝乎と考へ込む態をする。

『何を考へるのだ、大先生？』

『マ、マ、一寸待つてくれ。』
『金なら持つてないぜ。』
『畜生奴！　ハハヽヽ、先を越しやがつた。何有、好し、好し、まだ二三軒心當りがある。』
『それは結構だ。』
『冷評すない。これでも△△さんでなくては夜も日も明けないツて人が待つてるんだからね。然うだ、金崎の處へ行つて三兩許り踏手繰てやるか。——奈何だい、出懸けるなら一緒に出懸けないか？』
『何有、惡い處へは行かないから、安心して先に出て呉れ給へ。』
『莫迦に僕を邪魔にする！　が、マア免して置け。その代り儲かつたら、割前を寄越さんと承知せんぞ。左樣なら。』
そして室を出しなに後を向いて、
『君等ア薄野（遊廓）に行くんぢやないのか？』と狐疑深い目付をした。
その男を送出して室に歸ると、後藤君は落膽した樣な顏をして眉間に深い皺を寄せてゐた。
『遂々追出してやつた、ハハヽヽ。』と笑ひ乍ら座つたが、張合の拔けた樣な笑聲であつた。
そして、
『あれで君、彼奴はS——社中では敏腕家なんだ。』
『可厭な奴だねえ。』

『君は案外人嫌ひをする様だね。あれでも根は好人物で、訛せるところがある。』
『但し君は人を訛すことの出來ない人だ。』
『然うか……も知れないな。』と言つて、グタリと頤を襟に埋めた。そして、手で頸筋を撫でながら、
『近頃此處が痛くて困る。少し長い物を書いたり、今の様な奴と話をしたりすると、屹度痛くなつて來る。』
『神經痛ぢやないか知ら。』
『然うだらうと思ふ。神經衰弱に罹つてから既う三年許りになるから喃。』
『醫者には？』
『かゝらない、外の病氣と違つて藥なんかマア利かないからね。』
『でも君、構はずに置くよりア可かないか知ら。』
『第一、醫者にかゝるなんて、僕にア其　暇は無い。』
然う言つて首を擡げたが、
『暇が無いんぢやない、實は金が無いんだ。ハヽヽヽ。あるものは借金と不平ばかり。然うだ、頸の痛いのも近頃は借金で首が廻らなくなつたからかも知れない。』
後藤君は取つてつけた様に寂しい高笑ひをした。そして冷え切つた茶碗を口元まで持つて行つたが、不圖氣が付いた様に、それを机の上に置いて、

『ヤア失敬、失敬。君にはまだ茶を出さなかつた。』
『茶なんか奈何でも可いが、それより君、話ツてな何です?』
『マア、マア、男は其　に急ぐもんぢやない。まだ八時前だもの。』
然う言つて藥鑵の蓋をとつて見ると、湯はある。出がらしになつた急須の茶滓を茶碗の一つに空けて、机の下から小さい鐵葉の茶壺を取出したが、その手付がいかにも懶さ相で、私の様な氣の早い者が見ると、もどかしくなる位緩々してゐる。
ギシ〳〵する茶壺の蓋を取つて、中蓋の取手に手を掛けると、其儘後藤君は凝乎と考へ込んで了つた。左の眉の根がピクリ、ピクリと神經的に痙攣けてゐる。
やゝやあつてから、
『君、』と言つて中蓋を取つたが、その儘茶壺を机の端に載せて、
『僕等も出掛けようぢやないか！　少し寒いけれど。』
『何處へ?』
『何處へでも可い。歩きながら話すんだ。此室には、（と聲を落して、目で壁隣りの室を指し乍ら、）君、S——新聞の主筆の從弟といふ奴が居るんだ。恁　處で一時間も二時間も密談してると人に怪まれるし、第一此方も氣が塞る、歩き乍らの方が可い。』
『何をしてるね、隣の奴は?』
『其　聲で言ふと聞えるよ。何有、道廳の學務課へ出てゐる小役人だがね。昔から壁に耳あり

で、其　處から計畫が破れるかも知れないから喃。』

『一體マア何の話だらう？　大層勿體をつけるぢやないか？　蓋許り澤山あつて、中に甚※美味い饅頭が入つてるんか、一向アテが付かない。』

『ハハヽヽ。マア出懸けようぢやないか？』

で、二人は戸外に出た。後藤君は既う蓋を取つた茶壺の事は忘れて了つた様子であつた。私は、この煮え切らぬ顔をした三十男が、物事を恁うまで祕密にする心根に觸れて、そして、見窄らしい鳥打帽を冠り、右の肩を揚げてズシリ〳〵と先に立つて階段を降りる姿を見下し乍ら、異様な寒さを感じた。出かけない主義が、何も爲出かさぬ間に、活力を消耗して了つた立見君の半生を語る如く、後藤君の常に計畫し常に祕密にしてゐるのが、矢張またその半生の戰ひの勝敗を語つてゐた。

札幌の秋の夜はしめやかであつた。其邊は既う場末で、通り少なき廣い街路は森閑として、空には黒雲が斑らに流れ、その間から覗いてゐる十八九日許りの月影に、街路に生えた丈低い芝草に露が光り、蟲が鳴いてゐた。家々の窓の火光だけが人懷しく見えた。

『あゝ、月がある！』然う言つて私は空を見上げたが、後藤君は默つて首を低れて歩いた。痛むのだらう。吹くともない風に肌が緊つた。

その儘少し歩いて行くと、區立の大きい病院の背後に出た。月が雲間に隱れて四邊が陰つた。

『やアれ、やれやれやれ――』といふ異様の女の叫聲が病院の構内から聞えた。

『何だらう?』と私は言つた。

『狂人さ。それ、其處にあるのが（と構内の建物の一つを指して、）精神病患者の隔離室なんだ。夜更になると僕の下宿まで那の聲が聞える事がある。』

その狂人共が暴れてるのだらう、ドン〳〵と板を敲く音がする。ハチ切れた様な甲高い笑聲がする。

『疊たゝいて此方の人――これ、此方の人、此方の人ツたら、ホホヽヽヽヽ。』

それは鋭い女の聲であつた。私は足を緩めた。

『狂人の多くなつた丈、我々の文明が進んだのだ。ハハヽヽ。』と後藤君は言出した。『君はまだ那　聲を聞かうとするだけ若い。僕なんかは其　暇はない。聞えても成るべく聞かぬ様にしてる。他の事よりア此方の事だもの。』

然うしてズシリ〳〵と下駄を引擦り乍ら先に立つて歩く。

『實際だ。』と私も言つたが、狂人の聲が妙に心を動かした。普通の人間と狂人との距離が其時ズツと接近して來てる様な氣がした。『後藤君も苦しいんだ!』其　事を考へ乍ら、私は足元に眼を落して默つて歩いた。

『ところで君、徐々話を始めようぢやないか?』と後藤君は言出した。

『初めよう。僕は先刻から待つてる。』と言つたが、その實、私は既う大した話でも無い様に思つてゐた。

『實はね、マア好い方の話なんだが、然し餘程考へなくちや決行されない點もある――』

然う言つて後藤君の話した話は次の様なことであつた。――今度小樽に新らしい新聞が出來る。出資者はY――氏といふ名のある事業家で、創業資は二萬圓、維持費の三萬圓を年に一萬宛注込んで、三年後に獨立經濟にする計畫である。そして、社長には前代議士で道會に幅を利かしてゐるS――氏がなるといふので。

『主筆も定つてる。』と友は言葉を亞いだ。『先にH――新聞にゐた山岡といふ人で、僕も二三度面識がある、その人が今編輯局編成の任を帶びて札幌に來てゐる。實は僕にも間接に話があつたので、今日行つて打突つて見て來たのだ。』

『成程。段々面白くなつて來たぞ。』

『無論その時君の話もした。』と熱心な調子で言つた。暗い町を肩を並べて歩き乍ら、稀なる往來の人に遠慮を爲い〳〵密めた聲も時々高くなる。後藤君は暗い中で妙な手振をし乍ら、

『僕の事はマア不得要領な挨拶をしたが、君の事は君さへ承知すれば直ぐ決る位に話を進めて來た。無論現在よりは條件も可ささうだ。それに君は家族が小樽に居るんだから都合が可いだらうと思ふんだ。』

『それア先アさうだ。が、無論君も行くんだらう?』

『其處だテ。奈何も其處だテ――』

『何が?』

『主筆は十月一日に第一回編輯會議を開く迄に顔觸れを揃へる責任を受負つたんで、大分焦心(あせ)つてる様だがね。』

『十月一日！　あと九日しかない。』

『然うだ。――實はね、』と言つて、後藤君は急に聲を高くした。『僕も大いに心を動かしてる。大いに動かしてゐる。』

然うして二度許り右の拳を以て空氣を切つた。

『それなら可いぢやないか？』と私も聲を高めた。『奈何(どう)せ天下の浪人共だ。何も顧慮する處はない。』

『其處だ。君はまだ若い、僕はも少し深く考へて見たいんだ。』

『奈何考へる？』

『詰りね、單に條件が可いから行くといふだけでなくね。――それは無論第一の問題だが――多少君、我々の理想を少しでも實行するに都合が好い――と言つた様な點を見付けたいんだ。』

（未完）

青空文庫情報

底本：「石川啄木作品集　第三巻」昭和出版社
　　1970（昭和45）年11月20日発行
※底本の「『奈何《どうせ》せ」は、「『奈何《どう》せ」」にあらためました。
※疑問点の確認にあたっては、「啄木全集　第三巻」筑摩書房、1967（昭和42）年7月30日初版第1刷発行を参照しました。
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
入力：Nana ohbe
校正：林　幸雄
2003年10月23日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

札幌

石川啄木

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/